

夏休みを前にした全校講話

前進することと後ずさりすること

蘇南高等学校長 小川幸司

【開拓者精神～未来を読んで今を生きる】

本校は前期・後期制をとっているのですが、今日が終業式ではありません。しかし夏休みを前にした節目の日なので、全校の皆さんに私が考えていることを話します。

これまで蘇南高校が大切にしている理念が「開拓者精神」だということ、それは「未来」の人々の幸せの姿を想像して、「今」の自分がなすべきことを努力することだと皆さんに語りかけてきました。コロナ臨時休校のとき、学校再開後に蘇峽祭や部活動、学習を進めるとき、皆さんが未来を読んで今を懸命に努力しているのを見て、私はとても嬉しく思いました。

3年生は、まさにこれから進学・就職という進路実現に向かって、未来から逆算して今すべきことをコツコツと積み重ねていかねばなりません。1・2年生の皆さんも、日々を何となく流されて過ごすのではなくて、今日の自分のやるべきことを自覚して努力できるかどうかで、人生の充実度合いがかなり変わってくるということを、是非、実感してほしいと思います。今日やるべきこととは、自分で見つけていくものです。

【未来を見つめるようになったのは戦国時代から】

さて、このように私が皆さんに呼びかけていることは、未来を私たちの視線の「先（サキ）」において、そこに向かって歩いていく生き方です。「先のことを考えよう」というときの「サキ」は、未来を指します。

ところが、日本の長い歴史の中で、「サキ」という言葉が未来を指すようになったのは、およそ戦国時代以降のことで、それより前、つまり室町時代とか鎌倉時代、平安時代には、「サキ」という言葉は過去を指すものでした。

たとえば、中学の歴史の教科書に出てくる室町時代の徳政一揆（借金の帳消しを求める民衆の反乱）で徳政をかちとったことを記念した「柳生徳政碑文」というものがあります。そこには「正長元年より先は、(…)借金がない」と石に刻まれており、正長元年より以前の（過去の）借金を帳消しにするという宣言です。「先」とは未来ではなく、過去を意味しています。

サキとは目線の先ですから、昔の日本人は、過去を見つめながら、何だかどうなるのかわからない未来に、後ずさりしながら進んでいたというのが、生きるということのイメージだったと思います。（ちなみにこれを英語で言うと、“back to the future”になります。）未来のことは、神や仏でもない人間にはわかるわけがないと思われていたのです。

それに対して、織田信長とか豊臣秀吉、徳川家康は、自分の力で未来をこのような新しいものにする、しっかり未来を見つめて、未来に向かって歩むようになった。「先」という言葉は未来を指すようになった。いかにそれが革新的な生き方だったかが、わかるでしょう。その生き方を受け継いで、本校の開拓者精神があるのです。

【本当の開拓者とは未来と過去の双方を見つめる】

そこで今日の結論なのですが、「本当の開拓者」になるためには、「未来」とともに「過去」も読んで、今を生きることが大切なのではないかと皆さんに語りかけたいのです。目線の先に未来も過去も両方、置いた方がいい。

今、コロナによって世界中が混乱して、国と国の対立が急激に悪化しています。ウイルスが外国から持ち込まれるのを嫌ったり、政治家が混乱の中で自分の支持率を何とか維持しようとして「悪

い外国人と闘う自分」をアピールしたりする。これからワクチンの奪い合いも起こりそうだ、そこで過去に目線を向けてみます。

20世紀の前半に世界恐慌という経済パニックが起こり、自分たちだけは助かりたいという国があらわれ、他国に領土を広げたり、諸悪の根源だとレッテル張りした人々を迫害したりして、やがて第二次世界大戦という破局に突き進んでいきました。苦しい時ほど、地域や国をこえて人々が協力し合って、苦難を乗り越えていかなければならないというのが、歴史の教訓です。

皆さんも同じことです。過去に部活動や学習に打ち込めなかった自分を振り返り、同じことを繰り返さないように工夫する。誰かを愛そうとしてうまくいかなかった自分をきちんと分析して、自分の軌道修正をする。こうしたことって、とても大切だと思いませんか。

【目線のサキは、「未来と過去の両方」】

今日の結論です。私たちは織田信長のように生きるとともに、紫式部のように生きた方がいい。未来を目線のサキにおいて、未来に向かって歩いていくのだけれど、折々に過去を振り返って自分の立っている位置を修正する。そして再び未来に歩き始めるのです。目線のサキは、「未来と過去の両方」です。そんな生き方をしていけるといいですよ。

では、夏休み明け、皆さんと再会できることを楽しみにしています。